



まねっこ 大好き!

松並2丁目 村井静江さん 29歳

毎日、元気いっぱいの悠真。人見知りもなく、大好きな公園に行けば、ラジオ体操をしているお年寄りの隣で体操を試みたり、初めて会う子も気がつくともみんなお友達。好奇心旺盛で、最近は何でも自分で、と家事も手伝ってくれます。「ありがとう。助かったわあ。」と言っている私の顔は意外と引きつっていたりして。「うーん。仕事が増えたぞ。」と思いつつも、一人前にやりたがる子どもの成長を見るのは楽しいものです。きのうできなかったことが今日できたり、しゃべれたり。そんな毎日の成長をパパに報告するのが、私の日課です。

あっという間に過ぎる今。「この時間を、この子とともに自分も成長していかなければ。」と考えさせられる毎日です。



元気いっぱいの悠真くん(1歳8か月)

マイカー・デモシク ビルが生き生き屋上緑化!

ほとんど上がることもなかった築20年の郵便局舎の屋上(40坪と30坪)を有効利用するため、40坪には4坪のペイントハウスをつくり、キッチンとトイレとシャワーをつけて全開になる窓にしました。ソファに座ると目線に遠く筑波山、高架を走る電車。イングリッシュガーデンを参考にした左右対象のサボテンの庭は、雨水だけでも枯れません。



30坪の方には周りを椿、クチナシ、サツキなど1mの高さの木を植え、菖のひげで囲い、中央は花火を見るスペース。忙しい自分には手入れをする自信がないので、自動かん水機をつけ、時には伸びた枝を切ることで十分癒しの時間になっています。

屋上のガーデニングにより3階はエアコン要らずです。3度は省エネができ、毎日気持ちのいい時間を過ごしています。



横山町二丁目の飯島規恵子さん(52歳)

KOGA 万華鏡

二世中村蘭臺展

代表作「老子語五十顆」出品

古河出身の篆刻家生井子華氏の師が西川寧氏であることは、以前から幾度も紹介してきました。生井氏が弟子になるうと始めに門を叩いたのは実は二世中村蘭臺でした。しかし、彼は当時弟子をとらなかつたため、西川氏を紹介した訳です。後になり、生井氏は中村氏から指導を受けられました。

二世中村蘭臺は明治29年(1892)



観音開き衝立 二世中村蘭臺刻

用い、当初は蘭・桃・鳥及び磚(敷瓦)・瓦当(軒丸瓦の先端部分)といった形状に篆書を組合せて彫刻し、衝立や茶托に仕立てています。後には篆書を配した菓子鉢・帯鉤(帯止め)・肉池(印泥を入れる器)・煙草盆などを木で彫刻しました。今言うところの「刻字」の手法となるもので、本展示の見所となる部分です。

東京浅草に生まれ、篆刻の手ほどきを篆刻家であった父初世蘭臺から受けました。が、本当は軍人または医者になりたかつたようです。一方で高森碑蔵の紹介で、新井洞蔵に絵画を学び、また父の知人で画家の寺崎廣業に指導を受けていました。

界に導きました。特に「老子」から五十語を選び刻した老子語五十顆は、代表作となるものです。ちなみに、二世蘭臺は横山大観に五十三顆刻しているのを筆頭に、その作品は画家の川合玉堂・安田靉彦・中村岳陵・奥村土牛・伊東深水ら、また政治家岸信介ほか多数に支持されました。(9月19日、11月24日)

23歳の時に父が亡くなり、生活のために篆刻での生活が始まるわけですが、絵画と篆刻を融合させた実用性の高い篆刻工芸を生み出し、多くの素封家に受け入れられました。篆刻は石が材料となりますが、二世蘭臺は梨・梅・楠といった木材を

篆刻美術館長 松村一徳